



小牧市民病院 副院長

木田 義久

てんかんとは



てんかんの症状

一般的にてんかんとは、脳の中に発生した異常放電、いわば稲妻、あるいは雷と理解できます。小さなものであれば、その周囲の脳だけに影響が表れることとなりますが、これが大きな雷になり、脳全体に伝搬するような異常放電となると、広範な脳への影響から一気に意識を失うこともあります。前者は部分痙攣、後者は全般痙攣と呼ばれていますが、更にもう一つ、しばしば側頭葉に由来する複雑部分発作と呼ばれる発作もあります。これはさらに特徴的なもので、突然運動停止が起って立ちすくんでしまうものや、俗に夢遊病と呼ばれるように、夢見心地のまま勝手に歩き回ってしまうといった奇妙な発作もあります。

てんかん発作への対処

さて、偶然てんかん発作の現場に居合わせた場合の対処の仕方が問題となります。痙攣が果てしなく持続することは比較的まれであり、通常は数分の経過で終息して回復します。この間に十分な呼吸ができていないことや、意識が無いまま転倒し、頭や体を打撲してしまうことが心配です。口を開けて物をかませて呼吸路を確保してやり、仰臥位（あおむけ）にして安静を保てば、通常しばらくして意

識を回復します。もつとも、全く最初のてんかん発作となると、突然のことで、ご本人はもとより、ご家族も慌ててしまうことが多いようですが、ぜひとも冷静に対応いただきたいと思えます。ただし痙攣を繰り返し、停止しないような状況は危険ですので直ちに救急車を呼んでください。

てんかんの原因

てんかん、痙攣発作の診療で最も大切なことはその原因を探ることにあります。いわゆる真性てんかんのほかに、脳腫瘍や、脳血管奇形などの病気に由来するてんかんは、CT・MRIなどの画像診断で確認することが必要です。てんかんの診断に最も威力を発揮するのが脳波検査で、てんかん特有の異常な波（発作波）を確認することができ、診断を確定することができます。最近では更に進歩した究極の脳波検査としての脳磁図検査があります。この検査法は臨床床用として県内では小牧市民病院で初めて導入されていますので、ぜひご利用いただきたいと思えます。

てんかんの治療

以前はてんかん発作のために、いろんな場所で意識を失って倒れている人々を見かけることがありました。ところが近年ほとんどそうした

光景を目にすることはありません。てんかんの内服薬の開発が目覚ましく、大部分の痙攣発作が十分に抑制されるようになっていくからです。しっかりと内服薬を服用すること、睡眠時間を確保すること、疲労をためないようにすること、この三原則をしっかりと守っていれば、てんかんの発作はほとんど制御されます。ただ残念なことに抗けいれん剤は、てんかんを丸ごと治してしまう薬剤ではないことをしっかりと理解することがあります。何よりその原因を探って治療することが先決であり、病気によってはしっかりと完治できるものもかなりあります。

発作がなかなか軽快せず頻発する難知性（1日あるいは週に何回か発作がでるような場合）の症例は、更に詳しく検査を進めて対処することが必要となります。小児の高度の発熱に伴って発生する痙攣発作、意識消失の多くは熱性けいれんと呼ばれるものであり、てんかんとは明瞭に区別されます。またヒステリー発作もてんかん類似の発作が出現するため、しっかりと鑑別が必要となります。てんかんは基本的に脳に由来する神経症状と理解でき、心理的あるいは精神的な要因による症状とはしっかりと区別して対応することが必要です。

問合先 市民病院（☎76-4131）